琉球大学学術リポジトリ

ヨーロッパ人による初めての中国初等教育に関する情報の紹介：朱子編『小学』とノエルの翻訳

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2017-08-02 キーワード (Ja): フランソワ・ノエル, 朱子, 『小学』, 『列女伝』, 刺客, 諸葛孔明, 周滅渓, 部康節, 程明道, 程伊川 キーワード (En): 作成者: 井川, 義次, Igawa, Yoshitsugu メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/36969

ヨーロッパ人による初めての中国初等教育に関する情報の紹介
－朱子編『小学』とノエルの翻訳－

井　川　義　次
Yoshitsugu Igawa

The First Introduction of the Information about the Chinese Elementary Education by the European: Zhu Xi's Edit of *The Learning of Children* 『小学』 and Noël's Translation

キーワード：フランソワ・ノエル、朱子、『小学』、『列女伝』、刺客、諸葛孔明、周濂渓、邵康節、程明道、程伊川

はじめに

理性の時代を迎えたヨーロッパでは、宗教教育とは別途に、人間知識の増大と、徳性の寛容を通して、理想社会の実現へともたらす教育の普遍化と、それを実現する学校制度について関心がもたれていた。ただ普通教育、国民皆学が理念に過ぎず、具体的実例を提示できなければ、ひとびとにその必要と効果を信じさせるには説得力に欠けていた。もし学制が整い、優れた成果を遂げているような文明が実際に存在したとすれば、これを模範とすることができるだろう。

理性を尊重し、啓蒙を信奉するひとびとのなかに、そう考える者たちが現れた。ライプニッツや、その思想的後継者ヴォルフなどがその代表的人物である。とりわけヴォルフは、中国情報のうちに強い衝撃を感じていた。それは、古代中国においては、貴賤に差別なく、すべての国民が初等教育を受け、

進んで才能さえあれば、平民でも高等教育を受けられるという情報であった。

さてその情報源とは、イエズス会士フランソワ・ノエルによる『中華帝国の六古典』であった。本書はヨーロッパにおける最初の『四書』ラテン語全訳を収め、さらには当時聖典視されていた『孝経』ならびに、本稿で取り上げる『小学』の初訳 *Parvurorum Schola* を載せている。そのうち初等・高等教育に関する情報を含んでいたのが『大学』[11]と、『小学』である。

『小学』は学童課程の書として朱子の友人、劉清之が朱子から促されて著したもので、初等教育に必要と思われる古今の故事、社会における具体的徳行、ならびにそれがよって立つ原理、古今聖賢の言行による実証、宋学の重要人物に関する情報などが提示されている。引用文献も『書経』『周礼』『礼記』『管子』『論語』『孟子』『列女伝』『儀礼』『孝経』『春秋左氏伝』『戦国策』『説苑』等々、多岐にわたっている。『小学』編集に際しては、朱子がいわば印可を与えていたのであり、また最終的に朱子自身が手を入れ序文まで付したものである以上、そこには朱子の理念が十分反映している。

ところで筆者は、これまでノエルによる四書翻訳の実情について探ってきた。『中華帝国の六古典』の前半部分は四書の全訳であるが、そこでは朱子の経典解釈に則っていた。これは彼以前の『中国の哲学者孔子』の著者たちが―四書を翻訳しながらも―、神的霊的概念をも理気二元論にもとづいて合理的に解釈しようとする朱子の注釈を極力排除した姿勢とは全く異なっていたのである。

さて、『小学』はノエルの在華当時、朱子の編纂ということで通っていた。たとえそうでなくとも、朱子が最終的に手を入れたことからすれば、内容が朱子の意向に添うものであることは言うまでもない。だとすると、『小学』翻訳を手がけたという点で、ノエル『中華帝国の六古典』の意図は、『中国の哲学者孔子』の翻訳姿勢とまったく異なっていたことになろう。つまり、ノエルの『小学』訳業は、従来イエズス会士によって忌避されてきた朱子の見解そのものを紹介しようとしたことになるはずだからである。

そうであれば、ノエルには前代のイエズス会士のような、朱子ないし宋学アレルギーがもはやなくなっていたか、あるいはそれどころか、朱子ないし宋学哲学のなかに積極的、肯定的に評価すべきものがあると見て翻訳・紹介したのではないかと推測されるのである。

以下ではこのようなノエル訳『小学』を取り上げ、中国人の教育理念や、教育思想、また中国人が理想とする行動類型をどのように、解釈翻訳したかについて掘り下げてゆきたい。

1　「小学序」

はじめに朱子の初等教育に関する理念について概説する『小学』序文を取り上げよう。この序文をノエルは「『児童の学説』、著者、朱熹 CHU HI 先生―別名、文公―による序文」と訳している。

なお以下では、はじめに『小学』原文を提示し、ついでノエル訳からの拙訳を挙げておく。また拙訳の（　）はノエルによる補い、〔　〕は筆者の補いを表す

古者小学、教人以灑掃、応対、進退之節、愛親、敬長、隆師、親友之道、皆所以為修身、斉家、治国、平天下之本。而必使其講、而習之於幼稚之時、欲其習与智長、化与心成、而無扞格不勝之患也。

いにしえの児童の学説、あるいは学校は、その弟子たちに、朝には家の水まきや掃除の規範、質問された事柄に節度をもって受け答え、客を家に迎えたり家から送り出す規範、両親を愛し、目上の者を尊敬し、教師を畏敬し、仲間に親しむ規範（それらはすべて自らの習慣を形作り、家庭をおさめ、王国を統治し、帝国を平和にするのに第一義的な基礎、基盤である）を、詳細かつ個別的に教示するものである。それらは幼年時代からの学習において、生活上の無数の悪を避けるべく、だんだんと精神の怜悧さや心の正しさを獲得するゆえんである。

原文「修身、斉家、治国、平天下」はもちろん『大学』[2]の言葉であり、儒家の基本的テーゼである。つまり小学とは、最も初歩的な日常的社会道徳であるが、しかしこれら日々の着実な実践を通してのみ、天下泰平という人間の究極目的、ないし理想状態を実現することが可能なのだと断じており、ノエルはその所説をほぼありのままに引き写している。

ついで朱子はかかる理念と、その具体的教育内容の説かれる『小学』が散逸してしまったと述べ、おそらくそうであっただろう『小学』書を自らが再現ないし復元しようとの抱負を語る。

> 今其全書雖不可見、而雑出於伝記者亦多。読者往々直以古今異宜、而莫之行、殊不知其無古今之異者、固未始不可行也。今頗蒐輯以為此書、授之童蒙、資其講習。庶幾有補於風化之万一云爾。淳熙丁未、三月朔旦、晦庵題。
>
> ところで現在、本書の完本はもはや見出されないが、ただ大部分はそれが混在する古書のなかから今なお探り出すことはできる。
>
> ただ学芸の徒は相次いで、ひとがそれに対して生活方法を適合すべき今と昔の慣習が異なることを口実に、それを蔑ろにしてしまった。しかし彼らは現在と過去とで異なる慣習も、実地に応用できぬわけではないことを知っておくべきだったのである。
>
> そこでわたしは、少なくともおそらく習慣〔道徳〕の教導に有益となるだろう学説の小断片を、補充しおおせたと思われるくらい、あちこちから選択した学説の要点を抜粋し、子供らに教示、学習されるべき書物として復元した。そしてここに示す小著が補いとなってくれることを〔わたしは希望するものである〕。淳熙皇帝 Imperator Chun Hi の丁未 Tim Vi とよばれる歳〔西暦1187年〕、太陰暦三月一日に教師、晦庵 Hoei Ngan が記した。（以上、pp. 486-487）

以上、ノエルの翻訳は朱子『小学』編集の経緯を朱子の主張の通り、ありのままにトレースしており、過剰な説明的補いも、また逆に意図的な隠蔽や

削除もこれといって見られないのである。つまり『小学』序文を無害なもの、あるいはむしろ有益なものと見なして全訳したものであろう。

2　『列女伝』

冒頭で述べたように『小学』は、初等教育に有益な話題や実例を、古今の記録から任意に抜粋している。この章では『列女伝』から引用された記載を取り上げたい。『列女伝』は中国目録学の始祖として著名な前漢の劉向が著したとされる逸話集である。究めて平易で、しかも儒家的理念につらるかれて編纂された書物であるので、これがどのようにヨーロッパに翻訳紹介されたかということを知ること自体、興味深いことである。はじめに胎教の問題と、きわめて名高い「孟母三遷」について見てみよう。

①　胎教

『小学』の記述は、まずはじめに人間の生得的本性と、その淵源である天の至高性について説く『中庸』の記述からはじまり(3)、ついでその直後に『列女伝』の胎教に関わる文章が引用されている(4)。母胎と胎児に関わる記述を『小学』冒頭に置いているということは、あらゆる徳性の出発点が、まさに人間そのものが形成されるプロセスにあると見ていたことになる。つまり『小学』は、教育が幼児、児童の段階ではじめて施されるというのでなく、胎児の段階まで遡及するのだと主張しているのである。

はたしてノエルはこれをどのように訳しているのであろうか。胎教が主題となっているのは『小学』内篇、「立教」第一であり、ノエルは「内在的あるいは本質的部分」と訳している。

> 列女伝曰。古者婦人妊子、寝不側、坐不辺、立不躍、不食邪味、割不正不食、席不正不坐。目不視邪食。耳不聴淫声。夜則令瞽誦詩、道正事。如此則生子、形容端正、才過人矣。

2. 劉向 *Liu Hiam* が著した『列女伝』*lie niu chuen*、あるいは『女性の教導』ではこう説かれる。「むかし妊婦は、寝るとき横臥したり、座るとき（すなわち当時習慣だったようにムシロやゴザの上に〔座るとき〕）体を歪ませたり、立っているとき一方の足に寄りかかったり、不健康な食べ物、あるいは切り方の悪い食べ物を食べたり、無造作に置かれた敷きものに座ったり、野卑で不道徳な対象を見たり、放縦な音声をあえて聞くことがなかった。晩には盲人（すなわち音楽の教師）に『詩経』の周南・召南の二つの歌を朗誦させ（というのも、それらの歌は正しい家事の規律に関わっていたからであり、またむかしの盲人は、音の違いをよりよく識別できるところから音楽の指導に長けていたためである）、有徳な事績を語らせたが、それはこうすることで容貌の点でも、才覚の点でも秀でた赤子が誕生するようにとのことだったのである。(p. 488)

このように妊婦の内的外的行為が、直接的に胎児に影響するという古代中国人の擬科学的主張をノエルはほぼ素直に受け容れ、あらゆる教育の出発点が、胎児、ひいては母親の教育にあると訳出しているのである。胎教説自体、医学的に根拠があるかどうかはここでは論じられないが、ノエルの紹介を十分理由のあるものと見て賞賛した人物がいた。それがさきに述べた啓蒙主義のリーダー、クリスチャン・ヴォルフである〔『中国の実践哲学に関する講演』、1711〕。ヴォルフの胎教説に関しては稿を改めて論じたい。

② 孟子伝説

ついで孔子に次ぐ聖人、孟子の生い立ちに関するきわめて人口に膾炙した話柄を取り上げた「稽古」第四の部分を検討したい。この章は「往古についての探求」と訳されている。孟子に関する記述は「立教」の箇所に書かれており、これをノエルは「第1パラグラフ、正しき学説の制定に関する古代人の模範」と訳している。

はじめに「孟母三遷」についてである[5]。

孟軻之母、其舎近墓。孟子之少也、嬉戯為墓間之事、踊躍築埋、孟母曰。此非所以居子也。乃去舎市。其嬉戯為賈衒。孟母曰。此非所以居子也。徙舎学宮之旁。其嬉戯乃設俎豆、揖譲、進退。孟母曰。此真可以居子矣。遂居之。

2. 孟子 *Memcius*—孟軻 *Mem Ko* とよばれた—の母が、墓地の近所に住んでいたとき、葬式ごっこをして、いろいろなひとびとの役柄を演じるのを喜んだ。嘆き悲しんだり墓を建てたり、亡骸を埋める役をするのを楽しんでいた。母はこれに気づいてこう言った。「この場所は、我が子の教育に向いていない」と。

そしてただちに引っ越して、家を市場に移した。しかしそこで売り買いするひとびとの様子に興味を惹かれた孟子は、またもや商売ごっこに夢中になった。ふたたびこれに気づいた母は、「ここも我が子の教育に向いていない」と言って、すぐさま公立学校 *publica schola* のそばに居を替えた。

そこで幼少の孟子は、供物が捧げられ、畏敬する様が示され、他人にあいさつをしたり、謙譲する様や、客をもてなしたり送り出したりする儀礼が学校で教えられているのを見て、熱心にそれを学び、芝居のように〔その様子を〕演じた。その時母は、「この場所こそ、我が子の教育と住まいとして相応しい」と〔言った〕。そしてそこに住居を定めたのである。

ついで物心のついた子供には、戯れでも虚言や冗談を言うことを避け、親に対する信頼を貶めてはならないとする部分である。

孟子幼時、問東家殺豬何為。母曰。啖汝。既而悔曰。吾聞、古有胎教、今適有知而欺之。是教之不信。乃買豬肉以食之。既長就学、遂成大儒。

さてこんなことがあった。子供の孟子が、ある日、家の東側に住んでいる人がどうして豚を殺しているのかと母にしきりに尋ねた。「おまえに食べさせようとしているのよ」、と母はふざけて答えた。

しかしすぐさまこんな冗談を後悔し、「わたしは、昔の母親が子供を教育するとき、徳について教えるのに、十分配慮したと聞いている。今我が子は、もう理性を使用できる〔年齢に〕到達している *rationis usum adeptus*。だから口先で息子を騙したら、嘘や詐欺を教えることになってしまう」。そう言うと、子供を騙していると思われたくなかったので、すぐあの豚の肉を買い取った。

孟子が成長すると、智慧の習熟し、優れた知識をそなえた人物となったのである。(pp. 525-526)

原文自体究めて平易であり、訳出にもさほど困難はなかったであろう。ここで重要なのは、「胎教」を、古代の母親が「徳に十分配慮した」ことと解し、「有知」を、「理性を使用できる〔年齢に〕到達した」と人間本性や徳性に重きを置いたかたちで解釈的に翻訳していることである。

中国儒家の正統たる「性善」説を宣明した亜聖、孟子の生い立ちは、このようなかたちでヨーロッパ人に伝えられたのである。

3　歴史情報

さきに述べたように『小学』は、古今のさまざまな文献から素材を取っているために、歴史的事実についての情報も豊富である。また『小学』の取り上げる話題のなかには文学的に生き生きとした表現が見られるものがある。ヨーロッパ読者にとって、こうした比較的詳細な歴史情報やストーリー性ある物語を提供したのは、おそらくノエル『中華帝国の六古典』がはじめてだったであろう[6]。ヨーロッパ人がそれらをどのように受け取ったか知ることはわれわれにとって興味深いところである。そこで以下では、己を知るもののために命を投げ打った暗殺者、予讓の故事と、三顧の知遇に報いるため、五丈原頭に死するその日まで、故主、劉備玄徳に忠誠を貫き通した諸葛孔明に関する記述を取り上げたい。

① 刺客予讓

さて刺客、予讓の話は「稽古」第四、「明倫」の条に現れる。ノエルはこれを「第2パラグラフ、人間の条件に関する五種類の秩序に関する古代人の模範〔的行動〕」と説明的に訳している。すなわち人倫についての考察である「明倫」の「倫」を「人間の条件に関する五種類の秩序」、すなわち仁・義・礼・智・信の「五常」と解していたのである。

話は晋国内の政権争いに端を発する。智伯と敵対する趙襄は戦に勝利して智伯を殺し、その亡骸を辱める。智伯に知己の恩を感じていた予讓は復讐すべく刺客となるという筋である。

趙襄子殺智伯、漆其頭以為飲器。智伯之臣予讓、欲為之報仇、乃詐為刑人、挾匕首、入襄子宮中、塗廁。左右欲殺之。襄子曰。智伯死無後、而此人欲為報仇、真義士也。吾謹避子耳。

21. 晋国 *Cin*—すなわち山西 *Xan Si*—の宰相、趙襄 *Chao Siam* が、別の宰相、智伯 *Chi Pe* を殺し、瀝青(れきせい)を塗った彼の頭蓋骨を尿瓶にこしらえて使った。

この智伯の下僚、予讓 *Yu Jam* は、なんとしてでも主人の恥辱に報いようと、衣の下に短刀を隠し、罪人に身をやつした。そこで手下に捕らわれ趙襄の屋敷に連行されていった。〔予讓は〕屋敷で厠の周囲の壁に泥を塗って〔暗殺の機会を窺って〕いた。しかし事は露見し、部下たちは〔予讓を〕殺すよう請うた。

ところが宰相、趙襄は彼らに抗ってこう言った。「亡き宰相、智伯には敵(かたき)を取る後継ぎがなかった。〔しかし〕この者は自分の主君の仇を討とうとしたのだ。実に正義の家臣である。わしは〔これから〕彼に注意すればよい」と。そしてただちに〔予讓を〕解き放ったのである。

ノエルの訳文は予讓の趙讓暗殺に至る経緯を淡々と叙述しているように見える。ただ訳出に当たってはノエル個人の文学的嗜好がレトリックとなって現れているようである。というのも、実は『小学』の注釈として流布した明の

陳選『小学集註』にしても、清の高愈『小学纂註』にしても、原文の「飲器」についてある人の説を挙げ、「飲酒の器」か、「溲溺の器」すなわち「尿瓶」のいずれかであるか未詳であるとして、断定を避けていたにもかかわらずノエルが後者の説を選んで、訳出したからである。いくら仇敵とはいえ、死者のドクロを尿瓶に用いたとすれば、その憎悪の甚だしさが異常なほどに際立つ描写となるはずである。穏健であるべきキリスト教神父が、効果的な文学表現をむしろ自ら選んだのである。

つづく予讓の暗殺決行と処刑にいたる経緯を見てゆこう。

讓有漆身為癩、呑炭為唖、行乞於市。其妻不識也。其友識之、為之泣曰。以子之才、臣事趙孟、必得近幸。子乃為所欲為、顧不易邪。何乃自苦如此。讓曰、委質為臣、而求殺之、是二心也。吾所以為此者、将以愧天下後世之為人臣、而懐二心者也。後又伏於橋下、欲殺襄子、襄子殺之。

その後、この予讓は自分の全身に瀝青を〔塗って〕癩病者に見えるようにし、灼熱する炭を口中に投げ入れ、声を出す働きを自ら低下させ、街なかでもの乞いをしていた。ついにはあまりの変貌ぶりに、その妻さえも、彼とは見分けられなくなった。

ところが、友らはこれに気づき、泣きながら彼に訴えた。「君は有能な男だ。あの趙孟—すなわち趙襄—の従者になるすべを見つけ給え。彼の寵愛を得て親交を結んだ暁になら、簡単に君が望む限りのことをしおおせるじゃないか？。一体どうして、今、そんなにまでして無益に身を苛むんだ」と。

彼らに予讓はこう答えた。「もし俺が、彼に従者として身を捧げながら、後になって殺そうと望むとしたら、俺は極悪な詐欺と偽りの被告となるだろう。だが今俺は、俺の主君の仇(あだ)を討とうと熱望しているのだ。俺がこうするのは、後の世に、王の家臣になりながら、詐欺と偽りと陰謀とをもって、大手を振って世にはばかるような奴ばらをこの眼にするのを恥じるからなのだ」。

かくして彼は、ふたたび橋の下に身を潜め、主殺しの趙襄が〔車で〕通りかかったところを仕留めようとした。しかし宰相、趙襄は彼を捕らえ殺したのであった。(pp. 534-535)

以上がノエルによる刺客予譲に関する訳文である。キリスト者にとって、復讐は神にゆだねるべきであり[7]、それどころか右の頬を打たれたら云々[8]とあるように、報復は厳に戒められていたはずである。であるのにノエルがためらいもなくこの出来事を紹介したのはなぜであろうか。断定はできないが、あるいは中国滞在の間に、中国人のメンタリティーや感性、さらには価値観に同調・共感もしくは傾倒するところが増大していったからではないかと考えられる。それは『孟子』の初の翻訳を手がけたのがノエルであったことからも推測されるところである[9]。

② 諸葛孔明

ついで蜀の丞相、諸葛孔明の事績に関する紹介を見てみよう。これは外篇、「嘉言」第五の「広敬身」の条に取り上げられ、ノエルは「外篇」を「外在的あるいは付帯的部分」とし、つづいて「第3パラグラフ、自己研鑽をより拡大する近世人の卓越した言葉」と訳しており、そこでは北宋の学者で程伊川の友人であった胡安国の諸葛孔明評が取り上げられている。

常愛諸葛孔明、当漢末、躬耕南陽、不求聞達、後来雖応劉先生之聘、宰割山河、三分天下、身都将相、手握重兵、亦何求不得、何欲不遂。乃与後主言。成都有桑八百株、薄田十五頃。子孫衣食有余饒。臣身在外、別無調度。不別治生、以長尺寸。若死之日、不使廩有余粟、庫有余財、以負陛下。及卒、果如其言。如此輩人、真可謂大丈夫矣。

20. 〔胡文定 *Hu uen tim* 先生は〕……漢 *Han* 王朝の末期において傑出したきわめて有名な諸葛孔明 *Chu ko kum mim* のことをしばしば追慕していた。「諸葛孔明は、はじめ南陽 *Nam Yam* の村で農地を耕し、あらゆる身分や名声をも逃れていた。のちに将軍、劉備 *Liu Pi* に請われ

て家を捨て軍にしたがった。かくてついには地域、諸州を割いて全帝国を三つの部分に分割するほどの力を獲得した。それゆえ帝国諸州を統御し、全軍を己が権力下に保持していたからは、求めて得られぬものなどあっただろうか？しかし皇帝、劉備の嫡子〔たる劉禅〕につぎのように述べた。『わたしは故郷の街、成都 *Chim Tu*[10]に蚕を養う桑の木800本、穀物を実らす500ユゲルム〔原文「薄田十五頃」。ユゲルムは地積の名称。1ユゲルムは、一連ねの牛が午前中に耕すことができる面積〕の土地を所有しております。ですからわたしの子や孫にとって、衣食に必要なすべてのものは十分足りています。わたしはたしかに、この外地にあって職務に服しておりますが、帝国から求めるべき公的収入の他は、なにも期待は致しませんし、また我が家の蓄えをわずかばかりも増やそうなどとは望みません。ですからわたしが死するとき、倉庫に米や、金蔵に財産が残らぬようにすることで、陛下に対する忠誠と誠実を証明致しましょう』と。そしてたしかに彼が死んだとき、約束したとおりの結果であった。まことにこのような人物こそ真に英雄と言うことができるのだ」と。(p. 569)

自分の才能忠節を見込んで大任を与え、後事を託した主君、劉備玄徳に対し、生涯裏表なく、一死もて至誠を尽くした諸葛孔明は、東アジア文化圏に属する人間の琴線を震わせる理想的人間類型である。彼の廉潔な生涯は、このノエルの翻訳を通じて、はじめてヨーロッパ世界に紹介されるところとなったのである。

4　徳の源泉と人間の尊厳

朱子の『小学』編集の意図は人間の徳性を中心に据え、現実における躬行実践の必要を説くことにあったが、上に見てきたように、ノエルの翻訳は朱子のこうした方針をきわめて忠実になぞったものであった。ところで周知の

ように朱子においては人間のこうした徳性の源泉は「天」ないし「理」にあった。それではノエルはこの点をどのように捉えていたのだろうか。これについては、以下の『小学』所引『春秋左氏伝』のノエル訳文を材料として検討したい。このことに関して問題になるのが「稽古」第四の「通論」である。ノエルはこれを「第４パラグラフ、高貴さ〔倫理性〕と節度に関する古代人の模範」と訳している。

ここでは『左伝』成公十三年に起こった出来事が問題となる。諸侯の康公と粛公が、会同して秦を伐つ際に先勝祈願の祭を行ったが、粛公の態度がおざなりであったことに対して康公が批判したくだりである。

劉康公、成粛公、会晋侯伐秦。成子受脤于社、不敬。劉子曰。吾聞之、民受天地之中以生、所謂命也。是以有動作礼義威儀之則、以定命也。能者養之以福、不能者敗以取禍。是故君子勤礼、小人尽力。勤礼莫如致敬、尽力莫如敦篤。敬在養神、篤在守業。国之大事、在祀与戎。祀有執膰、戎有受脤、神之大節也。今成子惰棄其命矣。其不反乎。

劉国の長、康〔康公〕と成国の長、粛〔粛公〕が、軍隊を会同し侯国、秦―すなわち陝西―に支援を与えた[11]。

大地の霊 terrae Spiritus に吉兆を祈る供犠の祭をした litatum fuisset とき、供えられた肉が諸侯の兵たちに分配された。成国の長は、自分の取り分を受け取ることを拒絶した。

すると劉国の長は、取り囲んでいた者たちにつぎのように説いた。「わたしは昔このような教えを聞いたことがある。この世界に身を置く人間が生きるために受け取ったもの、それは摂理から生じている〔民受天地之中以生、所謂命也〕Quod homo, in hoc orbe positus, ad vivendum accipit, id ex providentia provenit と。だからあらゆる情動、行為、振る舞い、儀式の複合した外的規則〔動作礼義威儀之則〕が、確立するのに応じて、つねに摂理から流出する〔定命〕ex providentia emanat のだ。賢者はこの規則を愛護して幸福に向かい、愚者は遠ざけ

て破滅に向かう。そこで人君は高貴さ〔倫理性〕に、平民は力を使うことに専念するのだ。ただ高貴さ〔倫理性〕の実践では、敬意に優るものはなく、力の行使は勤勉に優るものはない。敬意はとくに霊の尊重に、勤勉はとくに自分の職務を実行することに存する。さらに、国家で最も重要なのは、大地の霊への犠牲祭と戦の供物だ。犠牲祭の儀式は、霊に対して肉が奉献されるよう求め、戦の供物は〔国の〕長によって供物の肉が受け取られるよう求めている。ところが今、成国の長は、この儀式を蔑ろにした。彼はかくして自ら摂理を放棄したのだ。であれば、こんな怠慢の罪が彼の頭に跳ね返ってはこないだろうか？」と。

このようにノエルは『左伝』の純粋中国的信仰と礼法に関する記載を、「霊」「天」「摂理」に重点を置いたかたちで解釈的に訳出しているのである。すなわち原文「民受天地之中以生、所謂命也」を「この世界に身を置く人間が生きるために受け取ったもの、それは摂理から生じている」と、文字通りキリスト教的観点から解説しているのである。このような表現は、もちろんノエル自身の神父としてのバイアスが、ストレートに反映したものと見るのが妥当だろう。しかしこの『左伝』の読みも、宋学的注釈が中間項に入ると考えれば、たんなる強引な解釈とは言えないだろう。たとえば上掲の陳選『小学集註』の「中者理之本然也……天地之理、人得之以生。所謂在天為命、在人為性者也」という注釈や、高愈『小学纂註』の「中、即降衷下民之中、天理之本然也。自人受之而言、謂之性。自天界之而言、謂之命……天地之理、人得之以生。其於日用之間、莫不各有当然之理」という解釈等々、性理学的観点からすれば、ノエルの訳文は「天」に「神」を代入したものに他ならないことが分かるからである。

5　宋学の代表的人物

『小学』は、内篇において主に経書の教説や古代人の模範的言動について

論及していたが、外篇においては朱子と劉清之、両者にとっての近代人ないし同時代人であり、またその学問上の先達として敬慕する重要人物たちの言行について言及している。たとえば顔之推、司馬光、陳瓘、周敦頤、邵雍、程顥、程頤、張載、胡安国、楊億、徐積、陳襄、羅従彦、等々、大立て者の言行が列挙されている。

それらのうち、宋学の重鎮たちの発言は、単発的にノエル以前の宣教師たちによっても引用されてきたが、ノエルにいたって、まとまった分量の情報が提供されたことになるであろう。

以下では周濂渓、邵康節、程明道、程伊川の四名に関わる記述を取り上げ、ノエル翻訳の実情と、その訳文からうかがえる彼らの主張に対する評価について探ってゆきたい。

① 周濂渓

宋学の筆頭と目され、『太極図説』や『通書』などを通して、儒教を形而上学的体系に組織立てるのに重要な役割を演じた周濂渓に関する文言につい見てゆきたい。その記述は外篇、「嘉言」第五、「広敬身」に現れ、ノエルはこれを「第3パラグラフ、自己研鑽をより拡大する近世人の卓越した言葉」と訳している。

周濂渓はここで、人間には聖人、賢人、士がありそれぞれ目的とするものに違いはあっても、天、乃至模範的先人を目標として努力しさえすれば、その程度に応じて、聖にも賢にもなりえ、力及ばずとも良き名を失わないと述べている。

> 濂渓周先生曰。聖希天、賢希聖、士希賢。伊尹、顔淵大賢也。伊尹恥其君不為堯舜、一夫不得其所、若撻於市。顔淵不遷怒、不弐過、三月不違仁。志伊尹之所志、学顔淵之所学。過則聖、及則賢、不及則亦不失於令名。
>
> 5. 濂渓の地の周先生 Doctor *Cheu* ex pago *Lien Hi*〔周濂渓〕がつぎ

のように述べた。「卓越した人物〔聖〕Viri excellentes は天 Caelum を、賢者〔賢〕Sapientes は卓越した人物を、学生〔士〕Discipli は賢者を模倣すべきものとして志す〔希〕。むかし〔殷の湯〕王の宰相、伊允 *Y Yn* と顔淵 *Yen Yuen* は、際立った知恵の賞賛によって名高かった。宰相、伊允は仕えていた主君が、帝王、堯や舜の徳 vires と、習慣〔道徳〕mores と、生き方 vita を模倣しようとしなかったり、あるいは小市民の一人でも正業に就いていないのを見たなら、あたかも市場のただ中で鞭打たれるのとまったく同じくらい羞恥した。〔孔子の〕弟子、顔淵は危害を被っても心の中で怒りを強く抑制し、それを他者に振り向けることはなかった。同じ過失に二度とは陥らなかった。三ヶ月間、敬愛、あるいは心の正しさ〔仁〕pietas seu cordis rectitudo を損なう事柄を犯さなかった。だから宰相、伊允を模倣すべく志し、彼が志望したことを志望する者や、弟子、顔淵と彼が学んだ事柄を学ぼうとする者であれば、そしてもし、自らの努力と気遣いによって、彼らを乗り越えるならば、卓越した人物〔聖〕となり、もしも〔彼らと〕等しくなれるなら賢者となり、もし等しくなれずとも、少なくとも有徳の人 probus となって、悪い噂を聞くことはないだろう」。(p. 565)

ここでもノエルの訳文では、独自の解釈が施されている。すなわち中華の聖人が天を則るべき基準とすることを「卓越した人物は天 Caelum を模倣すべきものとして志す」として大文字の“天”、すなわち神を模範としたと取ったのである。さらに伊允が主君の堯舜となることができぬのを恥としたことも、聖王、堯と舜の「徳」「習慣」「生き方」を範としないことを恥じたのだと、徳性に重点を置くかたちで捉えていることも注目すべきことである。

② 邵康節

つぎに『易』を研鑽し、性命象数を極めたとされる邵康節の発言に関わる箇所を見てみよう。それは「嘉言」第五の「広立教」の部分である。ノエル

のラテン語では「第1パラグラフ、近世人の卓越した言葉、正しき学説の制定について」と訳されている。ここでは人間の資質には上中下の三類型があり、上品は聖人であり先天的に善であり、中品は後天的学習によって善となり得る賢人、下品は教導しても悪に止まる愚人であると説いている

康節邵先生戒子孫曰。上品之人、不教而善。中品之人、教而後善。下品之人、教亦不善。不教而善、非聖而何。教而後善、非賢而何。教亦不善、非愚而何。是知、善也者、吉之謂也。不善也者、凶之謂也。

11. 康節邵先生 Doctor *kam cie chao*〔邵康節〕がつぎのように子孫に訓戒した。「三種類の人間がいる。あるいは最上位の段階にある者〔上品之人〕で、教えられずとも善人になる。あるいは中間の段階にある者〔中品之人〕で、学んでのちに善人になる。あるいは最下位の段階にある者〔下品之人〕で、どれだけ教えられても悪人であることに固執する infimi ordinis, qui quantumvis edoceantur, persistunt esse mali。最初の者は自然本性的〔生具的〕に具わった善性 comparata a natura bonitas を〔もつ〕者〔聖〕ではないか？つぎの者は学習によって獲得した知恵を〔もつ〕者〔賢〕ではないか？第三の者は無知によって破滅的資質を〔もつ〕者〔愚〕ではないか？ここから、善く行為することを知る者は、至福なる者〔吉〕beati〔とよばれ〕、悪しく〔行為する〕者は、悲惨なる者〔凶〕miseri とよばれるのである」。

元来、孟子を正統と見なす儒者は、性善説を正統と認めており、朱子自身も性善説の立場に立っていた。ただここに引かれる邵康節の主張は、むしろ人間の資質に三等ありとする韓愈の「性三品」説[12]に近いものであり、一見、人間本性が本来善であるとする説に触れかねないものがある。そこで上掲の陳選『小学集註』では「気質之性、雖有是三品、然天地之性、初無少異」すなわち、万物を構成する素材たる気質には上中下の三種類あるが、天地から与えられた本性には少しの違いもないと述べて三者の断絶を否定しているのである。

一方、ノエルは、愚人が愚人たるゆえんを悪に固執することにあるとして、その自由意志に問題があると見ており、また聖賢となるか愚人となるかは、善を知るか知らぬか、自覚するかどうかにあると訳出しており、原文を越えて解釈的な翻訳を行っていたわけである。そして人間にとって「吉」を「至福なる者」と理解し、善を自覚しこれにしたがう者こそがそれだと見たのである。

ついで吉である者の、吉である理由を具体的に説く部分である。

吉也者、目不観非礼之色、耳不聴非礼之声、口不道非礼之言、足不践非礼之地。人非善不交、物非義不取。親賢如就芝蘭、避悪如畏蛇蝎。或曰不謂之吉人、則我不信也。

「ところで至福なる者とは、不品行な有様を眼から、不品行な音を耳から、不品行な言葉を口から、不品行な場所を足から、きっぱりと排除する。悪い仲間とつきあわず、不正なものを受け取らない。香しい花であるかのように賢者と親交し、蛇蝎であるかのように愚者を逃れる。もしだれかが、こうしたひとびとは至福だということを否定するとしても、わたしは彼を信じないだろう」。

この訳では、非礼見るなかれ・聞くなかれ・言うなかれと説く『論語』「顔淵」篇の言葉を引いて、これを善の具体的内容であると説く邵康節の言葉が、ほとんど正確に訳出されている。

ついで凶の具体的内容を説く箇所について検討しよう。

凶也者、語言詭譎、動止陰険。好利飾非、貪淫楽禍、疾良善如讐隙。犯刑憲、如飲食。小則隕身滅性、大則覆宗絶嗣。或曰不謂之凶人、則吾不信也。傳有之。曰。吉人為善、惟日不足。凶人為不善、亦惟日不足。汝等欲為吉人乎。欲為凶人乎。

「反対に悲惨なる者とは、話をするときは偽装と見せかけを、働くときと無為なときは秘密の非行を異常なほどに追求する。利得の亡者、徳の偽君子、情欲の信徒、異様な悪に喜悦する者〔である〕。

善人を敵の伏兵のように憎悪する。飢えた者が喰らい、渇ける者が飲むごとく、手易く法に違反する。彼らを引き留める悪が軽ければ、己が命を失う〔だけだ〕が、重ければ、〔自分が〕一族を消滅させるか、子孫のときに破壊されることになる。もし、だれかがまた、こうしたひとびとは悲惨だということを否定するとしても、わたしは彼を信じないだろう。『帝国編年史』〔『書経』〕の「泰誓」篇 lib. Annalium imperialium cap. *Cin xi* [13]において、帝王の宰相で助言者の *Fu* が、以上のことをつぎのように総括する。彼は言う、『至福なる者にとっては善行を、悲惨なる者にとっては悪行を為すのに一日でも十分ではない』と。さて今、お前たちは至福なる者になりたいか、それとも悲惨なる者になりたいか？」(pp. 550-551)

このように「悪」であり「凶」である者がもたらす破滅的末路が、原文を十分ふまえて、内面からも外面からも捉えられており、洋の東西を問わず首肯される内容となっている。この文言に関してはヨーロッパの読者は好感を持って肯定的に評価したことは疑いなかろう。

③　程明道

さて宋学の代表的人物の内で、兄弟でありながらその個性がきわめて異なり、後の中国哲学に対照的な傾向性をもつ哲学体系たる、朱子学、陽明学に多大な影響を与えた程明道と、程伊川に関わる箇所を考察しよう。

はじめに兄である程明道の発言について見てゆきたい。ここでは古昔聖賢のあらゆる主張の本質は、外的刺激に誘われて放散した心を再び集約し、ついでその反省的な心によって、人事を究め、究極的には天に関わる事柄にまで到達することにあると、『論語』「憲問」篇の言葉を借りて語られている。

これについてノエルは以下のように程明道の言を紹介する。

明道先生曰。聖賢千言万語、只是欲人将已放之心約之、使反復入身来。自能尋向上去。下学而上達也。心要在腔子裏。(外篇、嘉言第五、広敬

身)

8. 程先生 Doctor Chim、別名、学識者 cognomento eruditus〔明道先生〕が言った。「古代の賢者たちが著した書物に含まれるすべての規定 praecepta は、つぎの一事を志向している。すなわち、ひとは散乱した魂〔放心〕dissipatus animus を回復すべきであり、魂を回復したら天的知識 caelestis scientia を求めるべきだと言うことである。ところで地的な諸事物に関する知識によって、天的な〔知識〕へと容易に上昇させられるものである〔下学而上達也〕。けっして心が、身体から不在とならないように。」(p. 566)

このようにノエルは程明道が古昔聖賢の学問の精髄を、散漫になった魂の働きを取りもどし、これによって地上の諸事物に関する知識を獲得すべきであり、そうすることができた暁に、天上の事柄に関わる知識へと、容易に到達できるのだと訳出している。これはほぼ忠実に程明道の主張を引き写しているが、語調は非常に楽観的にみえる。キリスト者にとって、人間は天に関わる事柄をさほど容易に知り得ないはずであるが、ノエルの訳文は困難さよりも人間の努力の最終的成果を強調するかたちで訳出していると言えるであろう。

④　程伊川

程兄弟の弟で、朱子の学問形成にとくに重大な影響を与えた程伊川の言葉について検討しよう。ここで伊川は『論語』「顔淵」篇における「己に克ちて、礼に復る」工夫の主要項目についてたづねる顔淵の質問からはじめ、それは「視・聴・言・動」において礼に反する事柄から自らを守ることであるとして、それら各々に関する警告、「四箴」を提示する(14)。

伊川先生曰。顔淵問克己復礼之目。孔子曰。非礼勿視、非礼勿聴、非礼勿言、非礼勿動。四者、身之用也。由乎中、而応乎外。制乎外、所以養其中也。顔淵事斯語、所以進於聖人。後之学聖人者、宜服膺而勿失也。

因箴以自警。

12. ふたたび〔先に述べたと〕同じ〔程伊川がつぎのように述べた〕。「弟子の顔淵が孔子に、自分自身に打ち克ち〔克己〕vincendus se ipsum、完全な心の正しさを獲得する〔復礼〕omnimodam cordis rectitudinem acquirendus 枢要の項目とはいかなるものかと尋ねたとき、孔子は彼にこう答えた。『もし高貴さ〔倫理性〕と相互に反対対立〔非礼〕する視覚対象が現れたら、見てはならない。もし〔高貴さ〔倫理性〕と相互に反対対立する〕聴覚対象が〔現れたら〕、聞いてはならない。もし〔高貴さ〔倫理性〕と相互に反対対立する〕話題の対象が〔現れたら〕、話してはならない。もし〔高貴さ〔倫理性〕と相互に反対対立する〕行動対象が〔現れたら〕、行動してはならない』と。これら四つの事柄はわれわれの心の責務であり、内的な徳によって外的事態に現れ、外的事態の調整によって内的な徳が養われる。弟子の顔淵は、この規定を遵守することで、最も崇高な徳 sublimissima virtus を獲得したのである〔所以進於聖人〕。したがってもし、崇高な徳を獲得しようと熱望する者は、その規定を精神に奥深く刻み込んでけっして忘れぬようにすべきである」。

ここで「克己」に当たる訳文が「自分自身に打ち克つこと」となっていることには問題なかろう。ただつぎの「礼」に関して「完全な心の正しさ」「高貴さ〔倫理性〕」と訳しているのが特徴的であり、こうした見解は程伊川の礼解釈に依存しているであろう。

そして以下に、人間の視聴言動に関するそれぞれの戒めについて語られる。

其視箴曰。心兮本虚、応物無迹。操之有要、視為之則。蔽交於前、其中則遷。制之於外、以安其内。克己復礼、久而誠矣。

視覚に関する勧告　われわれの魂〔心〕はそれ自体からして非物体的であるが animus ex se est incorporeus, 眼に見えぬうちに、物体的事物によって志向が歪められたり変化を被ったりする。したがって魂を支

配することが最高度に重要なのである。ところで魂を支配する規範は眼である。もしも眼が不正な事物を悦ぶなら、ただちに魂は擾動され変化を被る。反対に、もしそれら視覚対象を阻止するなら、魂は本来の平静を保持する。このように長い間、自己に打ち勝ち高貴さ〔倫理性〕にしたがうことで、ついには真実の心の正しさが獲得されるのである〔克己復礼、久而誠矣〕se ipsum diu vincendo & honestatem sectando, tandem verae cordis rectitudo acquiritur。

原文「心兮本虚、応物無迹」は「われわれの魂〔心〕はそれ自体からして非物体的であるが、眼に見えぬうちに、物体的事物によって志向が歪められたり変化を蒙ったりする」と訳しているが「心」が「虚」であることを、「魂」が「非物体的」であることとするのは神学的に理解したものであろう。だが宋学的には、虚は気とは別物ではないので、むしろ形体無きものと訳すべきであったのではないか。既存の知識はどうしても新情報理解の方向を左右するものである。

つぎに「聴箴」を見てみよう。

其聴箴曰。人有秉彝、本乎天性。知誘物化、遂亡其正。卓彼先覚、知止有定。閑邪存誠、非礼勿聴。

聴覚に関する勧告　天から注入された人間の自然本性は、実にそれ自体からして正しい Hominis natura a Caelo infusa, ex se quidem est recta。しかし、知性が聴取される不正な事物に惑わされ、欲求能力が奪われるならば、本性はその正しさを失ってしまう。卓越した思慮の指導者、教師たちは、聴覚を制限する規則を守ることで、不正な外的事物を排除する。彼らは真実の本性の正しさを保持することを知っている。だからあなたは、もしも高貴さと相互に反対対立する聴覚対象が現れたら、聞いてはならないのである。

ここで問題となるのは天与の人間本性である。ノエル訳文ははばかることなく「天から注入された人間の自然本性は、実にそれ自体からして正しい」

と直言している。人間の本性が天与のものであることを認めても、クリスチャンにとってそれはストレートに善ではあり得ないはずである。むしろ人間の自由意志に善をも悪をも選択できる能力があるということをこそ重視するだろう。だとすればノエルの翻訳は、ここにおいては、キリスト教の正統教義を顧慮せずに、中国人の言い分をありのままヨーロッパの知性の前に提示したことになるであろう。それはたとえば陳選注釈の「性即理也。人之秉彝、乃得於天之正理也」といった言葉にそのまま則ったものか、あるいは彼自らこの見解に共鳴するところがあったかのいずれかだったはずだ。

ついで「言箴」について。

其言箴曰。人心之動、因言以宣。発禁躁妄、内斯静専。矧是枢機、興戎出好。吉凶栄辱、惟其所召。傷易則誕、傷煩則支。己肆物忤、出悖来違。非法不道、欽哉訓辞。

言説に関する勧告　常に魂を動かすのは、そこから流露する言葉である。だから話す際に粗忽や軽率、無内容に気を付ければ、魂はすぐに安らぎ集中するだろう。さらに、たった一言の言葉からしばしば戦争や平和、不幸や幸福、不名誉や栄光が起こるものである。だからあなたの言葉に気をくばれ。なぜなら、もしだれかが軽率さや虚言によって罪を犯し、多弁や不条理を吐き出したり、〔また〕あなたが自分の言葉に対して節度なく、他者の言葉に逆らうのなら、損害を受ける事態を自分にもたらすことは、けっして疑いない。だから古代の賢者たちの言説でなければ、けっして口にしてはならないのである。この教示を注意して尊重せよ。

この訳文はとりたてて問題はないであろう。ただこのような勧告は中国人であれヨーロッパ人であれ、だれもが納得できる内容である。

最後に「動箴」である。

其動箴曰。哲人知幾、誠之於思。志士励行、守之於為。順理則裕、従欲惟危。造次克念、戦兢自持。習与性成、聖賢同帰。

行為に関する勧告　思慮あるひとびと〔哲人〕は、事物の精細さ〔幾〕

に精通しているから、分別と思惟において堅実であり〔誠之於思〕。勇敢なひとびと〔志士〕は、困難な事態を熱望するから、行動の着手と挙措動作において不撓不屈であるものだ。前者と後者は、正しき理性の道を進むとき、寛厚な魂をもつことを愛する〔順理則裕〕。逆にもし、自分の欲望に対して盲目的に惑溺する者はつねに不安なものである。もしだれか、突然の事態にすぐさま自己を支配でき、危険において慎重であれば、警戒することにだんだんと慣れたのちに、優れた知恵だけでなく、絶対的〔純粋〕な徳を容易に獲得するだろう。(pp. 566-567)

事物が動向する微細なきざしを知り、思考が堅実であるひとこそ賢者であると訳しているわけでが、これもほぼ程伊川ないし朱子の主張をトレースしていえるであろう。また原文の「順理則裕」を「正しき理性の道を進むとき寛厚な魂をもつことを愛する」との訳は完全に正確であるかどうかはともあれ、啓蒙時代のヨーロッパには強くアピールするものがあったと推測されるのである。

結　語

以上の通りノエルの訳した『小学』は、その編集の経緯からして朱子の意向が強く働いた著作であり、ノエル自身、朱子その人の労作であると信じていた。その意味からするとノエルは朱子の哲学を一定程度評価して、これをヨーロッパの知性に公表しようと意志したことは確かであろう。つまりノエルは従来のようなイエズス会内部の朱子乃至宋学忌避の態度を放棄していたことになるのである。

その翻訳からは、ノエルが人間本性、理性、そして徳性の涵養と陶冶を通して、人格感性と他者の自己実現、ひいては世界全体の平和を志向すると信じる儒家哲学、とくに朱子の哲学に傾倒していたと見ることは困難ではない。ノエルは自分がかつて求め、ヨーロッパが現に求めているものを供給すべく

筆を執ったのではなかったか。歴史に埋もれて脚光を浴びることのなかった一イエズス会神父は、ヨーロッパに新鮮な風を吹き入れたのではなかったか。

ノエルの『小学』翻訳は、刺激に満ちた未知の情報をヨーロッパ知性に了解できる言葉にくるみ込んで受け容れやすくしたものであった。しかしその効果を減ずることなしに。

〔注〕

(1)ノエルの『大学』翻訳に関わる問題については拙稿、「ノエル訳『大学』における性理学の解釈—「大学章句序」と「補伝」を中心に」(『人間科学』第11号、267-303頁、2003年3月)参照。

(2)上掲拙稿参照。

(3)ノエルの『中庸』翻訳に関わる問題については拙稿、「理性と天命—ノエル訳『中庸』と朱子『中庸章句』—」(『人間科学』第12号2003年9月)参照。

(4)下見隆雄『劉向『列女傳』の研究』(東海大学出版会、1989)の「巻一母儀」ではこの文言が『大戴礼』保傅篇に遡れることを述べ、さらにここでの主語となる、周の文王の母、太任の「任」の字が安産、胎教とイメージが重なる「妊」に通ずるのではないかと推測している。

(5)下見上掲書、224-225頁、注(7)では『列女伝』のこのくだりこそ、後世、孟子に関する史料としての性格を持つにいたったと説く。

(6)中国文学作品のまとまった欧語の翻訳は、『中華帝国の六古典』出版より24年後のプレマールによる「趙氏孤児」の仏文訳〔1735〕に帰せられる。

(7)「旧約聖書」申命記、第32章35節参照。

(8)「新約聖書」マタイによる福音書、第5章39節参照。

(9)ノエルの『孟子』翻訳に関わる問題については拙稿、「ヨーロッパ人に

よる『孟子』の初訳について―ノエル著『中華帝　国の六古典』における儒教解釈―」（『人間科学』第10号、19-50頁、2002年９月）参照。

(10) ノエル訳では諸葛孔明の故郷を成都としているが、成都は蜀の首都であり誤解であろう。

(11) ノエルのこの情報にも混乱がある。正しくは秦を伐ちにいったのである。

(12) 韓愈の性三品説については姜国柱、朱葵菊『中国歴史的人性論』（中国社会科学出版社、1989）参照。

(13) 原文は「泰誓」篇。ノエルは Cin xi と音訳するが訝しい。おそらくは「泰」と字形が似ている「秦」の字と取り違えたのであろう。またさらに、直後に現れる宰相の Fu については未詳である。あるいは「傳（でん）」を「傅（ふ）」と読みちがえたものか。

(14) 「四箴」については赤塚忠、金谷治、福永光司、山井湧編『中国文化叢書』２、『思想概論』（大修館書店、1968）、Ⅳ「人間観　３　修養論／木南卓一」の解説が詳しい。